

お茶うけ 第21話

横浜開港

「横浜の開港は、1859年である。それまでは砂嘴(さし)の上にわずかな戸数の漁村があるにすぎなかった」という、司馬遼太郎著『街道をゆく 21 横浜散歩』を読んでエッと驚き、横浜に住んで40年近くなのに、あまりにも横浜を知らないことを反省しました。

まず、横浜開港資料館(元英国総領事館)を訪れようと、横浜 - 大船間を海側に迂回して通るJR根岸線の関内駅で降りました。関内駅南口の海側(港側)に出ますと、目の前に横浜市役所が、道を隔てて横浜公園があり、ここにはプロ野球の横浜ベイスターズの本拠地である横浜球場があります。両者の間の道を港に向かって進み、公園のはずれで右折すると広い日本大通りにでます。横浜開港後、港に向かって通りの右側は外人居留地に、左側は日本人居住地と定められ、当時では珍しい洋館が建築されました。今の日本大通りは、1866年(慶応2年)の大火の後、1875年(明治8年)延焼防止のため道幅を広くして造られました。日本大通りを500m程進むと海岸通りです。

日本大通りと海岸通りが交わる右角に、目指す横浜開港資料館があり、横浜開港のいきさつを知ることができました。この資料館の庭には、日米和親条約ゆかりの玉楠の木が、関東大震災の猛火にも耐えて、今も葉を繁らせています。

1854年の日米和親条約と、1858年の日米修好通商条約の締結を受けて、1859年に神奈川(横浜)が開港されました。条約文では神奈川村に港を築くとありましたが、時の幕府は攘夷派が襲撃することを恐れて、幹線道路であった東海道から離れた横浜村を神奈川村の一部と見做らして、港を造りました。その頃の横浜村は、確かに住民100人ほどの漁村でありました。

さらに、幕府は長崎にある出島をモデルに、港と外人居留地と交易を行う日本人街の周りに、川を利用して掘割を巡らして外部から隔離しました。そして外部との通行口を絞り、関所を今の吉田橋(関内駅の北口、伊勢佐木町の入り口)に設けました。関所から港側の区域は関内と呼ばれていて、関内駅の名はその名残です。

関内の区域を今の地図で見ますと、JR根岸線の桜木町駅、関内駅、石川町駅を結ぶ区間の海側一帯で、外人居留地があったところは、中区山下町になっています。

次いで、近くの神奈川県立歴史博物館(元横浜正金銀行、元東京銀行の前身の本店)に寄って、古代、鎌倉、江戸、明治の各時代の神奈川の集落の図を觀ました。改めて今の横浜港の付近には、歴史に残るような集落、城、寺社がほとんど無く寒村であったことを確かめることができました。

神奈川県立歴史博物館から馬車道に沿って歩きますと、600m程で関内駅の北口に着き、吉田橋はここにありますが。この馬車道は、馬車が通った日本最初の道と言われ、最近、当時のガス燈を模した街灯が復元されています。

一旦開港しますと、寒村横浜村は、当初江戸、次いで東京の玄関に当たる港町として、全国から人が集まり、産業が興り、商業が活発になって目覚ましい発展を続け、今日の横浜市となりました。

ほんの半日の歴史散歩で、横浜開港の知識を得ることができ、地元横浜について、もう少し調べてみたいと思いました。

以上

参考資料など

- 「砂嘴」は、陸地から細長い砂洲がくちばしのように海へつき出て、入り江をいいたようなかっこうになっている地形をいう。船の碇泊地としては、うってつけであったろう。
『街道をゆく 21 横浜散歩』 司馬遼太郎著 朝日文芸文庫 より
- 横浜開港資料館 総合案内
- 神奈川県立歴史博物館 総合案内

